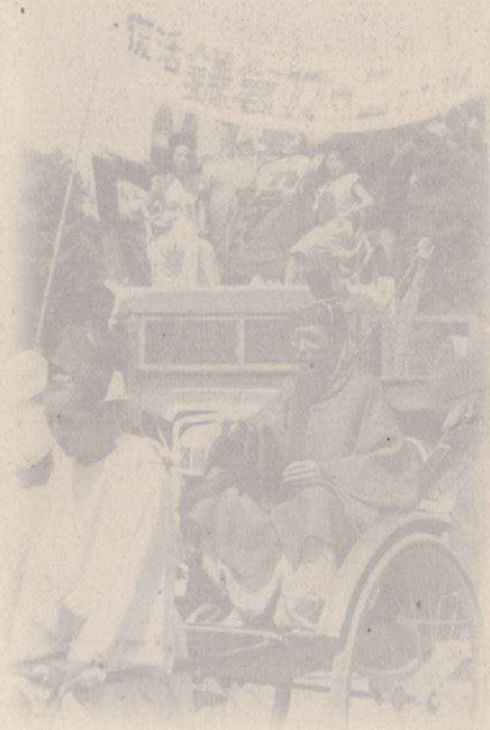


石山陽

遠き日々の鎌倉



かまくら春秋社

遠き日々の

江苏鑛業学院图书馆
鑛倉藏書章

石山陽

石山 陽（いしやま・よう）

昭和3年（1928）東京生まれ。東京大学法学部卒。昭和30年検事となり、横浜、静岡、東京の各地方検察庁、日本国有鉄道、法務省、最高検察庁等で勤務。平成2年（1990）福岡高等検察庁検事長で退官。運輸審議会会長を経て、現在弁護士。鎌倉市七里ガ浜在住。

遠き日々の鎌倉	著者 石山 陽	発行者 伊藤玄二郎	発行所 ㈱かまくら春秋社 鎌倉市小町二一―一五 電話〇四六七二五二八六四	印刷所 東京製版印刷	平成十年一月十六日印刷発行
---------	---------	-----------	--	------------	---------------

© You Ishiyama 1997 Printed in Japan
ISBN4-7740-0087-6 C0095

目次

鎌倉とのなれそめ

昭和十一年～十四年

ひねもすのたり／9

鎌倉とのなれそめ／13

カルチャーショック／17

妙本寺往昔／21

往事雜記／25

雪の下転居／29

附属小学校の思い出／33

遊び―運動会／37

通学道草記／41

松竹大船撮影所／45

二階堂昔話／49

附属断章／53

入学試験／57

戦争突入

昭和十五年～二十年

中学校入学／65

中学一年生／69

学級編成／73

戦争突入／77

戦時下風景／81

教練・体育まつ盛り／84

スパルタ教育／89

戦局日々に悪し／93
陸士入校／96
「花」／100
終戦／103
復員感懐／107

戦後寸景
昭和二十年～二十二年

旧制高校転入学／115
高校生活／119
戦後寸景／122
通学の青春／127
青春残像／130
市点景／134
記念祭／139
文芸復興／143
演劇物語／147
文芸活動花盛り／151
世相様々／155
大学入試／159

景気回復
昭和二十二年～二十七年

ダンスの流行／167
クラス会／171
恋のロンド／176
キャスリーン台風／180
アルバイト物語／184
ゆとりの鎌倉／188
戦後の変遷／192
失恋／196
大学卒業／201
赤い糸／205
江戸尻取り唄／209
亡き友のこと／213

文化都市鎌倉／217 カーニバルの日／221 松竹大船撮影所物語／226

景気回復／230 青春交遊録／234 往時回顧／239

回想世代

昭和二十七年～三十年

試験合格／247 レジャー時代／251 修習開始／255 災害と鎌倉／258 結婚／263

新所帯／267 回想の世代／271 若者伝説／275 修習生ワルツ／279

かまくら座／283 男性動物／287 Xマスパーティー／291 終章／295

あとがき 石山陽 301

カバー写真・復活カーニバルの行列(昭和二十二年夏)
(写真提供 久米和子)

装
丁

多
田

進

遠き日々の鎌倉

鎌倉とのなれそめ

昭和十一年～十四年

ひねもすのたり

江ノ電の電車は、稲村ガ崎駅から来る上りも、腰越駅からの下りも、大きなカーブで頭を振ってから、どっこいしょと七里ガ浜の海岸に出て来る。地元の住民にとっては見なれた風景であるが、観光客の口からは、突然眼の前に広がる大海原に一せいに嘆声とも歓声ともつかぬどよめきが起きる一瞬だ。

江ノ電のゆらりと曲がり春の海 亜耶女

今は、お二人とも故人となられたが、俳人石田波郷、石塚友二両氏の流れを汲む俳誌「鶴」の同人になっている家内の詠句であるが、穏やかな春日の下に、空と海の境もおぼろに広がる七里ガ浜の海には、正しく蕪村の詠ずる「ひねもすのたり……」の風情がある。そして、江の島と富士山を背景にノンビリと海辺を走る江ノ電の姿は、この風景に良く似合う。そんな七里ガ浜に土地を求め、家を建ててから二〇年経った。鎌倉に移り住んでからだともう六〇年になる。もっとも、これまでの役人生活で東京の宿舍住いなどしたため、約二〇年ほど中抜けの期間があるが、戦前の子供の頃から戦後に大学を出て社会人になるまで住み慣れた土地への郷愁は格別で、やはり終世の住家は鎌倉ということになりそうだ。

このあたりは、戦後比較的早い時期から西武系企業が、鎌倉では初めてといっても良い大

規模な宅地の開発、造成工事を手掛けて完成した団地だが、歳月を経てそれなりに落ち着いた住宅地のたたずまいを見せるようになって来た。先日、駅前から乗ったタクシーの運転手さんが、若い頃この団地の造成工事に従事したことがあるそうで、「この辺は掘るとすぐ鎌倉石の岩盤にぶつかるので作業に骨を折りましたよ。しかし、あれなら、きっと地震には強いだろうね」といっていた。

確かにこれまでのところ、地震では余りゆれないし、怖さは感じない。もともと、かの関東大震災クラスの地震となったらどうなるかは解らないが、庭の隅を掘って見ても三〇センチも掘ると軟かい鎌倉石の岩盤に突き当る。地盤がしっかりしているのは良いことだが、表土が薄く土地が痩せているので樹木の育ちが悪いのが難点である。家を建てた当時、庭に「かいづかいぶき」を並べて植えようとしたが、結局、縦に岩穴を掘って、苗木を中に置くだけという仕儀になった。木の方にとっても甚だ迷惑だったろうと同情しているが、何とか最近では塀よりは充分高く成長してくれた。

そういえば、子供心に記憶のある昭和初期の七里ガ浜の風景を思い浮かべると、この付近は、海際の江ノ電の線路（その位置は昔も今も変わらない）に沿って、鎌倉山の方までずっと続く一面の背の低い松林だった。七里ガ浜駅の周辺を除いては人家もまばらで、その駅も、当時はホームの屋根もなく海べりにひっそりと静まり返っていた。

駅のそばを流れる日蓮上人の龍の口の法難にゆかりのある行合川も、江ノ電の鉄橋、そし

昭和二十年代の七里ガ浜



て、最近架け替えられた行合橋のあたりは戦前からの面影を止めているが、それから下流、海に入るまでは、今のような護岸もなく、現在の海岸道路のあたりの広く白い砂浜を勝手気ままに蛇行し、砂丘を削り割って流れていた。一寸したグランドキャニオンの様相があり、その斜面を転げ降りたり、よじ上ったり、あるいは、身投げだとふざけて、飛び降りたりと、たまに、七里ガ浜の知人宅に母に連れられて遊びに行くときのひそかな楽しみだった。

さて、春日遅々たる海の風情は穏やかそのものだが、へ七里ガ浜の磯伝い……と唄われるように、この浜辺には磯浜が多いので、少し荒れると三角波が立ち易い。しかも、僅かな砂浜も引波が強いため、由比ガ浜や材木座の海岸と違って、砂鉄の採れた稲村ガ崎の根元などごく一部を除いて遊泳には昔から適さないものとされて来た。せいぜい磯釣りや磯遊びぐらいしかできなかった……いや、しなかったといった方がよいだろう。

そういった言い伝えを、素直に守った気持の底には、例のへ真白き富士の嶺^か 緑の江の島……の鎮魂の哀歌で知られる旧制逗子開成中学校生徒のボート遭難事件の伝承が、まだ風化していない戦前の時期とあつて、子供心にも波が荒くなつたときの七里ガ浜の海に對して、怖れにも似た畏敬の念があつたからだと思ふ。

それが今はどうだろう。鳥の啼かぬ日はあつてもサーファアの姿を見ない日はないというほどあちこちの沖合いにサーフボードに乗つて波待ちをしたり、ウインドサーフィンを樂しむ人の姿が見受けられる。稲村ガ崎寄りの浜辺には、大潮の時に長く海中に突出した姿を見せる大きな磯があり、子供の頃、父に連れられてよく磯釣りに來たものだが、その辺はとりわけ波が立ち易いので、かなり荒れた日でも若者が沢山集まつている姿が見える。

波にまかれて磯に叩きつけられたら、身体中すり傷だらけになるだろうし、打ち身ではすまないこともあるかも知れない。まして強い引潮で沖に引かれたら大変だろうにと思ふのだが、黒いウェットスーツに身を固めた現代の子達は平気で、オットセイの群よろしく波間に浮いている。昔なら、絶対海に入るなといわれるような荒波の立つ日でも、かえつてそれを目当てに若者が集まつて來るのだから、こちらとしては、ただその恐れを知らぬ勇氣に脱帽し、この海を甘く見て事故を起さないようにと祈るばかりである。

今の七里ガ浜高校の前は、こうしたサーファー達の駐車場として賑つてゐるが、戦前のこの辺は広い砂浜で、昭和の初期から戦後まで、海に沿つて江ノ電の古い車体は何輛分か置か

れていた。夏にはキャンプのバンガローとして使われたり、磯遊びの人達の休憩所などとして使われたりしていたと記憶する。この風景を見たことのある人ならば、かなり古くからの鎌倉の住人といつてよからう。この風景も海岸道路の整備が終わるころまでに、いつとなく消えてしまった。

鎌倉とのなれそめ

七里ガ浜の今昔について述べてみたが、ここに住むまで鎌倉のあちこちにいたので、その想い出話もしてみたい。

その前に、鎌倉生れでもないのに、鎌倉の昔話をするとなれば、鎌倉とのなれそめから説明する必要があるだろう。

私が、東京市蒲田區蒲田（現在の大田區蒲田）から、当地に引越して来たのは、昭和十一年二月中旬。かの二・二六事件の起きる直前だった。当時小学校二年生だったが、三学期途中で転校させられたのは、その年の一月中旬、父が働いていた松竹キネマ蒲田撮影所が、大船に移転して来たからにはかならない。

父は、大正九年（一九二〇年）の蒲田撮影所開設後間もなく松竹キネマに入社した。最初

は、映画監督を夢見ていたらしいが、口説かれて映画俳優になってしまった。芸名を「石山龍嗣」といい、日本映画史に特筆されるほどの業績を挙げたわけでもないが、大正後期から昭和一〇年代まで数多く松竹映画に出演している。父が若手として活躍していた大正後期というと、私の生れる前の話になってしまいが、先ごろ、東京の古本屋で偶然見付けた日本映画年鑑（大正十三・四年版 朝日新聞社発行）によると、松竹蒲田所屬の俳優名鑑に父の名前のほか、主だった男優陣として、井上正夫、諸口十九、勝見庸太郎、岩田祐吉、島田嘉七、藤野秀夫、鈴木伝明、奈良真養らの名前が見える。ついでに女優陣といえ、栗島すみ子、川田芳子、三枝千代子、若葉照子、東栄子、筑波雪子、英百合子、林千歳、飯田蝶子らがあり、新進の田中絹代は加茂撮影所所屬として出ている。他社を見ると、後日松竹に移籍し、更にソ連領への愛の逃避行をした岡田嘉子や、酒井米子、梅村蓉子らの名が日活に、市川百々之助、五月信子が帝キネに、阪東妻三郎、高田稔が東亜に、そして小笠原プロには後に上原謙夫人、加山雄三の母となる小桜葉子が子役として可愛い顔を見せていた。

今の若い人ばかりでなく、かなりの中年の人々でもこれらの名前に馴染みがないのが普通だろう。ああ懐かしいと思う人は、相当以上の御年輩か、大変な映画通である。

私が物心ついたころの父はもう中年の脇役として出演していたが、記憶に残っている父の親しい仲間には、小林十九二、坂本武、日守新一、岡村文子らの諸氏がいる。

数年前、評判になった映画「キネマの天地」に、往年の蒲田撮影所の正門前の風景が出て